

(福祉) 根石小学校 5年

## ぼくたち・わたしたちにできること

5月～ 2月(55時間)

### 1 ねらい

- ・ 障害者についての調べ学習を通して、人にやさしい工夫とは何かを考えることができる。
- ・ 福祉実践教室や『福祉の村』との交流を通して、相手を思いやる心を育むことができる。
- ・ 福祉実践教室や『福祉の村』との交流や調べ学習を通して、福祉について身近に考え、自分たちができることを実行することができる。

### 2 実践の概要

#### (1) 福祉実践教室

まず初めに、福祉とは何かを学習し、障害者について調べた。視覚障害、聴覚障害、肢体不自由など様々な障害があることが分かった。そうすると、「そのような方たちはどのような生活をされているのかが知りたい」、「実際に自分も体験してみたい」などのという声が挙がってきた。

6月29日、4時間使って福祉実践教室を行った。内容は、車いす体験・手話・点字点訳・視覚障がいガイドの4講座から2講座を選択し、実際に体験するものであった。岡崎市社会福祉協議会から紹介された8名を講師に迎えた。どの講座も子どもたちは意欲的に取り組むことができた。



車いす体験



視覚障がいガイド



手話



点字・点訳

今日の福祉実践教室では、視覚障がいガイドと点字・点訳をしました。視覚障がいガイドでは、障がい者役をやった時に階段が予想以上にこわかったです。だからガイド役をやった時には階段でこわい思いをさせないように気をつけてガイドしました。点字はおもしろかったけれど、さわっただけでは全然分かりませんでした。障がい者の方たちが、こんな思いで生活をしているなんて初めて知りました。

福祉実践教室を終えてのA男の感想である。A男以外にも、体験を通して不自由さや恐怖・不安など、調べただけでは分からないことを体験を通して感じる事ができた。

## (2) 『福祉の村』との交流

本校では、毎年『福祉の村』との交流を行っている。今年度は、『福祉の村』の中でも『若葉学園』との交流を11月15日と12月9日に行った。『若葉学園』は障がいをもつ就学前の子たちがいるところであり、本校に招待して学校案内したり、グループごとに分かれてゲームを行ったりした。子どもたちはこの交流を楽しみにしていて、終わった後の感想でもその思いが書かれていた。



工作を一緒に行う

ぼくたちは、会議室で工作とくじ引きをしました。若葉学園の子に折り紙をちぎってもらいました。その子は指の力が弱くてなかなかちぎれませんでした。先生が切り込みをつけるアドバイスをしてくれたので切り込みをつけてみたら、すぐに折り紙を破ることができました。さっきまでその子はしゅんとしていたけれど、ここに顔が変わっていました。次の交流が楽しみです。

【二回目の交流後のB男の感想】

また、12月9日には清楽荘の餅つき大会にも参加させていただき、学校の運動会での学年演技であった「一天濤快」を披露し、その後餅つきも行った。



『一天濤快』を披露



餅つきを行う児童

演技を行っている時に、音楽に合わせて手拍子をしてくれる人がいたり、一緒になって体を動かす人がいたりした。そして演技の後には温かい拍手をしてくれたため、児童は寒い中半袖の体操服で行ったが、演技したことをとても喜んでいて。また、餅つきをするために並んで待っていた時に、「よかったよ」、「ありがとう」などと声をかけてくる人たちもいて、子どもたちは「やってよかった」、「またやりたい」という声が挙がっていた。

## 3 実践を振り返って

福祉実践教室や『福祉の村』との交流を通して、今まで体が動く、目が見えるなど当たり前になっていたことが、とてもありがたいことであると感じることができた。また、自分たちが生活している中ではあまり感じないけれども、これらの実践を通して、「もっと点字がある看板があればいいのに」とか「今度は盲導犬について詳しく知りたい」などの思いをもつことができた。

本校では、教師の読み聞かせである「ふれあい読書」を行っているが、11月から『五体不満足』（乙武洋匡・著）を取り上げた。子どもたちは写真を見て最初は驚いていたが、中身を知るうちに、「障がいをもっていても、考えや思いは他の人と一緒だ」と感じる事ができた。

障がいをもつ人を特別扱いをするのではなく、一人の人間として普通に接することが大切であることを実践や『五体不満足』から学んだ。